



大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和5年12月20日

長崎市立西北小学校

文責：校長 江原芳樹

第7号

新型コロナウイルス感染症が5類となり、暮らしの様々なことが、大きく前進した令和5年も、残り10日となりました。皆様にとって、この「令和5年」は、どのような一年だったでしょうか？お子様の成長の喜びも、成長に伴ってあらわれる新しい不安や心配事も、それぞれにあったのだと思います。そうしたすべてのことを受け入れながら、子どもたちが自分の足で自分の道を歩いていけるよう、学校と家庭がともに手を携えて取り組んでいく、そんな令和6年を創っていきたくて願っています。

持久走記録会について

11月末から12月にかけて、各学年・学級で持久走記録会を行い、保護者の皆様の温かい応援をいただきました。ありがとうございました。また持久走記録会后に、保護者の皆様から、いくつかの声をいただきました。

令和2年、改訂された学習指導要領が全面実施となり、教科によっては学習内容も改訂されたものがあり、体育科もその一つです。新しい学習指導要領では、「持久走」という学習内容がなくなりました。

現在は、「体づくり運動」の「体を移動する運動・動きを持続する能力を高めるための運動」の中に、発達段階に応じて、次のように表記されています。

【1・2年生】

- 一定の速さでのかけ足
 - ・無理のない速さでかけ足を2～3分程度続けること。

【3・4年生】

- 一定の速さでのかけ足
 - ・無理のない速さでかけ足を3～4分程度続けること。

【5・6年生】

- 時間やコースを決めて行う全身運動
 - ・無理のない速さで5～6分程度の持久走をすること。



西北小学校では、上記の体育科のねらいを受けて、各学年・学級で工夫をして取り組んでいます。持久走記録会は、その取組を通して立てた、子ども一人ひとりの目標への挑戦の機会です。

以前行われていた「持久走大会」とは、目的や取組の内容が変わっているため、現在は「持久走記録会」と称しています。持久走記録会の案内の前に、保護者の皆様にもその主旨をお伝えしておく必要があったと、反省しています。

次年度以降も、体育科のねらいに沿って、子どもたちの体づくりの取組として、各学年・学級で工夫していきますので、ご理解いただきたいと思います。

冬休みには

12月23日から、冬休みに入ります。今年は、17日間の冬休みです。日頃なかなか会うことのできない、おじいちゃんおばあちゃんや親戚の方と会うこともできるでしょう。身体も心も成長した姿を、ぜひ多くの方に見てもらいたいものです。

さて、冬休みには次のことを心掛けて過ごしてほしいと考えています。

1. 生活のリズムを大きく崩すことなく過ごしましょう。

年末年始など、夜更かししたり、早起きしたりして日頃と違う生活リズムの日が増えます。冬休みにしかできない楽しみもありますが、「今日は～だから」と見通しをもった過ごし方を心掛けましょう。

2. 計画的に学習に取り組みましょう。

17日間を見通した学習の取組に挑戦しましょう。学校からの課題だけでなく、自分に必要な学習を考え、取り組んでいくと3学期への大きな自信となるでしょう。

1月9日(火)、元気にみんなが登校してくるのを待っています。

キュビナについて

現在、長崎市の多くの市立小中学校で、AI型ドリルとして「キュビナ」が採用されています。西北小学校も、「キュビナ」を採用し、活用をしているところです。

キュビナでは、様々なデータを見ることができ、子ども一人あたり、どれぐらいの平均回答(問題への取組回数)であるかを知ることができます。10月では平均450回でした。一か月で3000回以上も取り組んでいた児童もいました。

令和5年度は、長崎市がMECXBТとしてキュビナを採用したことから、使用料が無料でしたが、令和6年度からは有料になります。月料金が200～250円を想定しています。

これからの学習の在り方は、こうしたAIドリルのさらなる活用が予測されています。自分に合った学習の取組として、一層活用できるようにしていきたいと考えています。

《校長散歩道 No. 7》

平昌オリンピック女子フィギュア代表の宮原知子選手が、ハイレベルな戦いの結果4位でした。その演技後のインタビューのことです。

NHKの記者は、宮原選手へのインタビューの第一声を「残念でしたね。惜しくもメダルに届きませんでした。お気持ちを聞かせてください。」としました。

宮原選手は、表情を曇らせ、「そうですね…」と力のない声でインタビューに答えていきました。その内容も、メダルを取れずに申し訳ないという反省の弁が中心です。

その後、民放で松岡修三氏が宮原選手にインタビューをしました。あの熱血キャラクターの松岡氏です。その第一声は、「すごかったですね。パーソナルベストですよ。」でした。宮原選手の結果は、順位としては4位でしたが、宮原選手個人の成績で見るとパーソナルベスト、自己最高得点をマークしていたのです。松岡氏のインタビューを受けた宮原選手は、パッと表情を明るくし、けがをしてからも諦めずに練習に励んできた過程を自己評価し、今回の結果に対して、関係者に感謝の気持ちを表していました。

宮原選手の結果は同じ結果であるのに、声のかけ方で結果を不十分なものと捉えさせるのか、成果として捉えさせるのか、全く違った印象を与えています。

さて、私たち大人の声かけは、子どもにとってどちらなのでしょう？